

五木寛之著、親鸞（完結篇、下巻）300、
303 ページより引用

++++

同じ東国出身でも、無骨な唯円ゆいえんとちがって、蓮位れんいにはどこか弱々しいところがあつた。

念仏のことについても、自分のほうから親鸞に問いかけたりはしない。訪ねてくる念仏者と親鸞のやりとりを、うしろで黙つてきいているだけである。

ときたま東国からの文などを、親鸞のほうから読んできかせることもあつた。しかし、かすかにうなずいたりはするもの、すすんで自分の意見をのべたりはしない。そんな蓮位が、めずらしく親鸞に物言いたげな表情をしている。

「なにか不審に思うことがあるようだよ、蓮位どの」

と親鸞は手招きしていった。

「ここにお坐りすわ。たずねたいことがあるのなら、遠慮せずにききなさい」

「いえ、そんな顔をしておりましたとしたら、申し訳ないことです。お仕事でお疲れでございました。しばらく横になってお休みになられてはー」

「がまわぬ。いうてみなされ」

蓮位は、恐縮しながら親鸞の前に坐った。そして遠慮がちにたずねた。

「兎日も東国のかたからおたずねがあったようでございますが、かなり多くの念仏者のかたがたが迷い悩んでおられることがございますようで」

「それで？」

蓮位は目を伏せて、口ごもりながら、
「**法**然上人は、**弥陀**みだ**一**いち**仏**ぶつを信ぜよ、とおっしゃったのでございましょう」

「そうだ」

「そういたしますと、阿弥陀仏以外の神や

私は信じなくてもよい。いや、**神祇不拝**だと、こう説くかたがたもおられました。いえ、いまもそう教えられる先達せんたつもおられます。しかし、親鸞さまは、いつぞや東国のかたがたにお書きになった文をわたくしに読んできかせてくださったことがあります。たが、その中で、**冥衆護持**みやうしゆごじというのをのべておられました」

親鸞はうなずいた。

「だしかに」

冥衆みやうしゆ、**とは**、**目にみえぬ神々や仏たち**、

と考えてもよろしゅうございませうか」

と蓮位はいった。親鸞は坐りなおして、

蓮位の顔をみつめた。

蓮位の顔には、なにか強い決意のようなものがうかんでいる。それはこれまで蓮位が見せたことのない表情だった。親鸞はいった。

「そなたは真剣にたずねている。わたしも

それにこたえなければならぬ。よいか。これまで蓮位どのを弟子と申うたことは一度もないのだ。念仏者の一人として、ききたいことをきくがよい」

「ありがとうございます」

蓮位は床に手をついて頭をさげた。そしてしばらくためらったのちに、顔をあげていった。

冥衆護持、ということとは、阿弥陀仏以外の神々や仏、菩薩などもお認めになるということでございますか」

「そうだ」

親鸞はうなずいた。

蓮位は目をそらさずに親鸞をみつめた。

「では、^{みだ いちぶつ}阿弥陀一仏、という教えは、まちがいでしょうか。念仏者は、阿弥陀仏をただ一筋に信じておまかせすればよい、とずっと教えられてきたのでございます。法然上人も『^{せんぢやく ほんがん ねんぶつ しゅう}選択本願念仏集』のなかで、そうお

示しになっているのではありませんか」

「それはちがう」

親鸞は静かに首をふった。

「多くの神々や諸仏のなかから、われらが阿弥陀仏という仏を選択せんじやくしたのではない」

「と申しますと」

「がわらつぶてのごときわれらに、阿弥陀仏のほうから手をさしのべてくださったのだ、とわたしは思っておる。ほかにどこにも行きやうのない、われらに手をさしのべてくださった仏がおられる。ああ、ありがたい、という声が念仏になった。そして、ただ一筋にその仏に帰命きみやうする。念仏者がたのむのは弥陀みだ一仏。そんな念仏者を健気けんきと思つて陰ながら見守つてくださる神々や諸仏がおわす。だからこそ、世の神々や諸仏を軽んじてはならない。冥衆護持みやうしゆていとは、そういう意味だ」

「しかしー」

と蓮位はどこか納得しない顔つきだった。

「お言葉を返して申し訳ございませんが、

その弥陀一筋の信心の健けん気さには、どこか
自力じりきの気配が感じられるのです」

「それはこういうことではないか」

親鸞は膝をのりだして語りだした。熱の
こもった口調だった。

蓮位も、いつもとちがう面もちで耳を傾
けた。